

第2回行政改革推進会議有識者議員懇談会で出た主な意見

- 行革はこれまでインプットを削減することに主眼を置き、アウトプットは測定できないとなっていた。将来、社会がどうあり、国が持続的であるために、どういう力をどう活用していくべきか議論が必要。
- いつまでも先延ばししない、先がないとの覚悟が必要。大きな改革は煎じ詰めれば世代間の対立になるので、その意味でも30代、40代で議論する意味はある。また、行政が自分達の生活に影響しているという意味で、行政を身近なものにすることも重要。
- 行政は無謬性症候群から脱却してほしい。また、自分の力ではどうしようもない人を助けるのが行政の役割であり、自助が基本だということをこの際はっきりと言うべき。
- 世界の意識調査の結果を見ても、日本人は国の現状を良いと評価するが、国のために何かしようという意識は低い。一方で、問題意識を共有すると日本人は強い。課題認識をシェアして、持ち帰ってもらい、周囲の人達と何ができるのかという議論をしても良かったらよい。
- この種の議論は歓迎であり、近未来の課題整理から入っていくべき。また、何をやるかは重要だが、出口をイメージして、誰がどう実現するのもかも大事。
- 30代、40代の人達に現実をえぐってもらい、何が不安か、何が問題かなどまずは全て吐露してもらうことから始めたら良い。また、若手の行政関係者の意見も聞いてみたらどうか。
- 継続性や積み上げではない、そもそもの国のあり方論を議論してほしい。増税と行政サービス水準のようなトレードオフの問題について、何を選択するのかという議論が国民の間に起こるきっかけにしてほしい。

以上